

論文の和文要旨

論文

A descriptive Study of the Lachi Language
—syntactic description, historical reconstruction and genetic relation—

氏名

小坂隆一

0. 導入

ここで研究対象とするラチ語が所属するカダイ（タイ・カダイ）語族は、タイ語、ラオス語など一国の国語となっている比較的良好に知られた言語を含む一方で、中国・ベトナム国境を挟んで山間部の村に点在する、ほとんど一般にはその存在の知られていないケラオ語、ラチ語、プベオ語、ラハ語、プーヤン語（さらに最近にはヴェトナムでヌンヴェーン語という言語も新たに発見された）などの少数民族言語をも含む言語族である。

筆者が調査をおこなった地点におけるラチ族の言語状況は、母語こそ今だにラチ語であるが、ラチ族自体の数がそもそも極めて少数である上に、多くのラチ族が、彼等の居住する地域の通用語となっているタイ系のヌン語、そしてベトナムの国語であるベトナム語を支障なく操ることができ、それらからの言語的干渉を絶え間なく受けるという危機的状況にある。

1. 音韻

音韻についてとりわけ目立つ特徴はないが、比較的特徴的な点は、原則として本来語においては閉鎖音系末子音を全く有さないこと、先行する母音を鼻音化させる機能をもつ末子音（ここでは-Nとして表わす）が存在すること、多音節型声調言語であり様々なパターンの連声（トーン

サンディ)が存在するということが挙げられる。また、/m//ʔm/ や /ŋw//ʔŋw/ などそれ自体で音節をなす子音(シラビック・ソノーラント)が存在する。音節数の観点から見れば、ラチ語は、タイ(Tai)諸語のような単音節型言語ではなく、二音節語、三音説語も多く見られる多音節語の範疇に入る。また、その多音節性に関連するが、各音節の構造自体は単音節型言語に比べると安定性を欠き、その結果、種々の同化・異化現象、連声など隣り合う音節間における音声的相互影響現象が著しく頻繁に見られる。

2. 形態論

ラチ語は、形態論的には、原則として一切の形態変化を行わない孤立的言語であるが、究めて豊富な接頭辞の体系を有し、この接頭辞の有無あるいは差異により様々なペアーが存在する。他に、畳音法による語形成法が存在するが、今日ではさほど生産的に機能するものではない。

3. 品詞分類

本論では、ラチ語の品詞カテゴリーとして、その統語的・意味的特徴により一応以下の八つに分類する。

1. 名詞類

原則として主語、目的語、主題として機能する。

(1) 名詞

名詞は、名詞類の中で最も重要なグループである。普通名詞、固有名詞などの下位範疇が存在する。

(2) 代名詞

名詞代替語としての機能を持つ。代名詞のうち、本来的な代名詞は単独で機能し、修飾部を伴った形では現われない。

(3) 類別詞

基数詞が名詞を修飾する場合に介在的に必要とされてくる語である。一部の、修飾する名詞が固定化された類別詞を除き、名詞類修飾語として働く場合が主であり、名詞表現(名詞句)の中心(head)には通常ならない。

(4) 指示詞

事物を差し示す機能を有する語である。指示詞は、代名詞的に単独で機能することができ、また名詞修飾語ともなるが、名詞表現の核には通常ならない。

(5) 数詞

数詞は、事物の数量・順序を数える場合に用いられる語である。名詞類修飾語としての機能が主であり、名詞表現の核には通常ならない。又、名詞類を修飾する場合には、類別詞の介在を必要とする。

2. 動詞類

動詞類の主たる機能は述部を構成する機能である。

(1) 動詞

原則として述部核として機能し、通常目的語をとるものを動詞という。但し、移動動詞・存在動詞及び一部の動詞は目的語を必ずしも要求しない(=自動詞)。名詞同様、主語、目的語、主題としても機能する。

(2) 形容詞

原則として述部核として機能するが、目的語はとらない。また、動詞の場合と異なり、述部として機能する場合、動詞、あるいは動詞表現をその主語としてとることができる。また、名詞類修飾語としてのみならず、動詞類修飾語としても機能する。

(3) 繫合動詞

名詞類補語を後に従え、主語と同等の資格で連結するものと、変化の過程を包含するものがある。

3. 副詞類

専ら述語の補語ないしは修飾語として機能するもの。動詞類により表わされる動作・状態の時間・空間、数量、程度、様態などについて限定する機能を持つ。

4. 独立詞

単独で節を構成しうるものを独立詞と呼ぶ。

(1) 応答詞

対話者の疑問的発話に後続する、応答を表わす語を表わす。

(2) 態語・擬音語

畳語法により構成される擬音語・擬態語の類。

5. 助詞

動詞類を従え、あるいは後続し、その動詞・形容詞によって表わされる動作・状態のアスペクトや話法的様相（話者の態度）について限定を行うもの。

(1) 前置助詞

動詞類に前置される。動詞起源のものが存在する。

(2) 後置助詞

動詞類に後置される。完了・不完了相は後置助詞によって表わされる。

6. 前置詞

名詞類を従え、その名詞類の表わす概念について時間的・空間的限定を行うもの。

7. 小辞

必ず名詞類あるいは動詞類に伴われて現われ、原則として単独では現われ得ない。統語関係を漠然と表わすものや強調・疑問・命令・確認など話者の態度を表わすものが存在する。

(1) 非文末小辞

主に文法関係を示す。

(2) 文末小辞

主にモダリティを示す。

8. 接続詞

語彙素、表現、あるいは節など様々な統語的単位を種々の意味関係でつなぐ語彙素。

4. 統語論

ラチ語は、類型論的観点から言えば原則的にはSVO型の孤立言語であり、動詞の活用、名詞の格変化などの一切の形態的变化を行わない。但し、SVO型の言語にあっては逸脱的ともいえる修飾部＋名詞核型の構造が散発的に見られる。その原因は今のところはっきりしない。

5. 借用語

借用系語彙については、比較的由来のはっきりしているものとして漢語からのものと越語からのものが挙げられる。また、ヌン語も、究極的にはラチ語と同系の言語ながら、一部ラチ語彙の供給源となっている。ベトナム語からのものについては、大方は、末子音を独自の形で保存するその音節形式により比較的近年に行われた借用によるものであると判断される。これ以外にも、借用の可能性が疑われる形式が一定数存在するが、それらの起源を特定することは現在のところ不可能である。

6. 通時論

筆者は、本論において幾つかの顕著な通時音韻的特徴を共有するケラオ語、ラチ語の諸方言形を参照し、又、他の同系言語の助けも借りて、ケラオ・ラチ祖語レベルの韻の再構を行った。その上で、音韻的・語彙的特徴からカダイ諸語におけるケラオ・ラチ祖語の系統的な位置付けを試みた。なお、Kosaka(1997, b) の論孝中 *ā-Reducing-Final-Rule と名付けた通時的音韻特徴、即ち *a < *ān (, *ām, *āŋ) 及び *āʔ < *āt, *āk (, *āp ?) を *a < *ān (, *ām ?), *a < *āŋ 及び *āʔ < *āt (, *āp ?), *āʔ < *āk へと改める。このきわめて特徴的な韻の変化は、ケラオ・ラチ祖語の *o が、もともとの *a に由来するという筆者の推定と密接に関係している。この *ā-Reducing-Final-Rule の推定については、Hlai 語西方方言やモン・クメール系のパラウン語などにおこった変化がその蓋然性を傍証的に支持する。

再構され得たケラオ・ラチ祖語の母音体系は現在のところ五つの単母音 *i, *a, *ə, *o, *ɨ (*i, *a, *ə, については長短の対立が存在する) と二つの母音結合 (*ua, *ia) ということになる。

7. カダイとミャオ・ヤオ

ベネディクトにより、かつてその同系性が主張されたことはあるものの、これまで対応関係の不確かさのため、とりあえずは孤立的な言語群として扱われることが多かったミャオ・ヤオ諸語のカダイ諸語との関係については、これを、主としてカダイ諸語との一定分量の韻の対応を根拠として、遠い昔、それらと同系であったと推定し、ミャオ・ヤオ諸語を含む語族全体を新たにタイ・カダイ語族と名付けてその大まかな下位分類を試みた。但し、両者間の頭子音及び声調の

厳密な対応関係の確定はこれからの作業として残る。また、ミャオ・ヤオ諸語と他言語族の言語との類似例も散見されるが、いずれも同系性を主張するには未だ難点が多く、現時点では支持しにくい。なお、ベネディクトがオーストロ・タイ仮説の中で同系言語として含めたオーストロネシア諸語については対応を支持する確かな実例が寡少であると判断され、現段階ではこれを系統上未確定諸語群として扱っておきたい。

8. 結論

以上を系統樹として整理すると以下のようなになる。

